
神の選択と抗う絆

鷹崎 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の選択と抗う絆

【Nコード】

N7349Z

【作者名】

鷹崎 弘

【あらすじ】

突如隼の前に現れた死神テトラは隼に願った。

世界を救ってほしい、と。

隼は強引にテトラに異世界に転移させられるが、隼はどうすれば世界を救えるのかを教えてもらっていない。

異世界という変わり果てた日常の中で隼は、出会いや別れ、取り留めないことでさえも通して過去のトラウマから抜け出し、変わろうとする。

00 まぬけな死神と意外な事態（前書き）

序章

壊された日常

00 まぬけな死神と意外な事態

とある少年は夢を見ていた。

そこには一人の小さな小学校中頃の少年と、もう一人、荒々しい雰囲気を漂わせている中年目前くらいの男性がいる。

男は少年に起こっている。激怒である。

少年の身体の至るところに痣があつた。ぱっと見ただけで十は確実に越えていることが分かる。

明らかにその男に暴行を受けていた。

——いや、今も受けている。

——男の両手は少年の首を絞めている。

しかし、少年の顔には恐怖の色が窺えない。

涙も流していない。

代わりに擦れたら声で、泣いてもいないのに不思議だが、必死に言葉を紡ぐ。

「ご、ごめん…なさい。に、どと…あんな、こ、と…しま、せん。

ゆ、ゆるして……くだ、さい。——さん」

男は少年が発したこの言葉に、呼ばれ方に、さらなる怒りを見せた。

「俺をそう呼ぶんじゃないやねえつつつてんだろ!! この——がつ!!」

あらがみはやと

学校から帰宅後、荒神隼は学ランと言う特徴のまったく無い制服のまま近くの飲食店になんとなく行きたくなったので入店している。

高校を入学し、一ヶ月が経ち、ようやく慣れ始めてはいるが、やはり疲れているのだろう。

隼は適当な軽食を店員に頼んで、すぐに机に伏して寝始めていた。

そして五分ほど経過して、隼が目を覚ます。

徐々に徐々に隼の頭は覚醒していくその時だった。

突如、隼の目の前に一台の車が現れた。

車の中で運転していたのは、中年の男性だった。

いや、運転していると言う表現は適切ではないかもしれない。

彼は寝ているのだから。

だから店に突っ込んできている。

確実に自分に当たることも分かった。

頭は動いても身体は動かない。動かなかったのだ。

隼は反射的に強く目を閉じ、身体を強張らせる。

店内には壁が破壊される音と同時に赤い液体と潰された肉片が弾けていた。

「……生きてる？」

それが、恐る恐る目を開けた隼の第一声であった。

隼はいつの間にか寝転んでいる状態になっていた。

(……車にひかれたけど、当たり所がよかったとか?)

そう考えながら隼は普段通りの力の入れ方で、まず上半身を持ち上げてみる。

「……痛く、ない?」

なぜか隼は全く痛みを感じることなく上半身を持ち上げることができた。

「たしかに、俺は車にひかれた……よな?」

もはや、車にひかれることすら半信半疑の状態であった。

特に、目を閉じていたため、車と衝突した瞬間を見えていないことと、痛みが全く無いことが隼の頭を余計に混乱させている。

「んー………ん? あれ? ここどこ?」

隼は今まで気付かなかったのだが、ふと、辺りを眺めてみると、そこは明らかに先程までいた道路ではなかった。

一番異なっていたことは、自分でも今までどうして気付かなかったのかと思うのだが、隼は今、自身の身体ですらも見えない程の闇の中にいたのだった。

「——やっと目が覚めたな。待ちくたびれたぞ。あと5分、目が覚めるのが遅かったら叩き起こすところだったぞ」

不意に、頭上から声が聞こえた。

その声の主は口調こそ男のようなところもあるが、声色は若い女性のものだった。

「……誰?」

当たり前の疑問が隼の口からこぼれた。そもそも隼はどうしてここににいるのか、自分でも分かってない。

「そうだな……まあ、私のことはテトラとでも呼ぶといい。確認しておくが、お前の名は荒神隼で間違いないな？」

「え、ええ、そうですけど……どうして俺の名前を？」

そもそもあなたはいつたい……？」

彼女は素早く隼の意を汲み取って、こう話を続けた。

「おっと、呼び方なんてどうでもいいな。私は何者なのか、だな」

「……そうです。あなたは何者なんですか？」

「私は……そうだな……お前達、人間に死神と呼ばれている存在、と言うところかな」

「……え？」

隼は、何を馬鹿なことを言っているんだ、と思いもしたが、それ以上に、言い方こそ雑だが、テトラは本気で言っているように感じられた。

「本気で言っています？」

「ああ、本気だとも」

テトラは一瞬たりとも間を空けることなく断言した。

「……」

「……」

「……証拠を見せてもらえませんか？」

「まあ、よいが……その前に堅苦しい話し方やめにしないか……昔のことを忘れるとは言わないが、もう少し器用にできないかのか？」

「——っ！！」

テトラのその言葉によって隼の頭の中に昔の記憶が蘇る。

そして、それが彼を覆いつくそうとする。

恐怖によって。

「すうー…はあー…」

隼は大きく深呼吸することによって、どうにか落ち着きを保てた。

「どうしてそのことを知っているのかは、分かりませんが、まず、証拠を見せてください」

「分かった。分かった。」

「……ふむ。さて、なにをすればお主に認めてもらえるのか…？」

しばしの沈黙。

そして、テトラが話します。

「よし！」

ならばここで人の理を越えた力を見せれば、認めてもらえるか？」

「……分かりました。本当にそんなことができるのならば、認めましょう」

と呆れたように言ったものの、テトラのその自信に溢れた物言いが隼を不安にさせる。

「では、いくぞ…と、その前に隼、頭上をよく見ておけよ」

「わ、分かりました」

隼は、ごくり、と唾を飲み込む。

そして――

頭上から一筋の雷が隼に向かって、直撃してきた。

「――っ――！」

当たり前だが、雷は光の速さを持つため、隼がその雷に気付いたのは直撃した後だった。

だが、それが自らに向かって落ちてきたことは認識できた。

また隼の目は暗闇の中にいるせいで分かりにくい、その眩しさ

によつて焦点が微妙に合っていない感覚があつた。

「どうだい？ 信じてもらえたかな？」

呆然としている隼にテトラは尋ねた。

「…え？ ああ……いや、少し待つてくださいっ！」

俺は雷に当たつたのでは！？」

隼は死んでいない。それどころか、痛みすら感じていなかった。だから、このような質問が出てきたのだ。

「ん？ ああ、今は雷ではないぞ。今はな——」

——「才能」と言う名の光だ——

「……は？」

目が覚めてから、驚くばかりの隼だが、驚くということがは無くなる気配は無かつた。

それ以上にもはや聞いたことが間違ひだつたのでは、と思うようになつてゐる。

「…分かりました。信じることにしましょう」

「助かる」

隼は何とも言い難い思いがあつたのだが、一応はテトラのこと認めた。

いや、認めざるをえなかつた

「それで？ その死に、が……！！」

隼はテトラを死神だと信じた後になつて、ようやく思い出す。事故にあつたことを。

「そう、か…俺は死んだつてことですか……」

それなら完全に納得…とまではいかないが、わずかに納得できるところがある。

「魂の回収というものですか……」

「いや、違うが」

「えっ……!？」

「……………」

テトラは当然の様に隼の発言を否定した。

隼は恥ずかしいことを真面目に言ったからだろうか、顔に熱を感じ、赤くなっているのが分かった。

また、テトラが少し面白がっている気がした。

「な、なら、何が目的なんですか？」

その質問に対してテトラは一拍おいて、真剣な声で話します。

「…私がお前を呼んだ訳は……隼……お前に世界を救ってほしい……」
「……………」

隼は、もはや何に対して、どう驚べきなのか、自分でも分かっている。
いない。

つい先程、意味の分からない力を見せつけられ、ありえない存在を認めさせられ、とうとう、隼自身に対しても理解できないことを求めてきた。

隼はもう何も言えなかった。

「理解しがたいのは分かる。だが、もはや時は一刻を争うのだ」

——私達にもお前にも。

「……え？ 俺にも？」

「そうだ。まず、私が言っている『世界』とはお前が思っているようなものではない。」

隼は首を傾げた。

しかしテトラは仕方ない、と言う風に話を続ける。

「お前に分かりやすく言うならば、救ってほしいのは全ての過去、

現在、未来。そして全ての平行世界だ」

テトラは真面目な口調で話している。

隼も意味は分かった。

だが、ただそれだけであつた。

「まず、お前にはある地に赴いてもらう必要がある」

「……その前に聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「あの、俺は死んだはずではないのですか？」

隼はテトラの言う『世界』は理解不能とし、一番気になっていたことを聞いた。

「ん？」

ああ、そうだな……そのことについても話さないとならないか……

ふむ、どこから話すべきか……」

隼の額から汗が流れる。緊張しているのだろう。

そして、テトラは再び口を開いた。

「よし、まずはどこに行ってもらうからかな。隼、お前には——」

——異世界に転移してもらう。

「……………」

「……………」

「……………」

「さて、その異世界とはな——」

「ちょっと待ってください!!」

「まあ、黙っておれ。まずは私の話を全て聞け」

そのテトラの声は今までと異なり、相手に有無を言わさないものだった。

「……………分かりました」

「よい。まず、その世界の名はこちらの世界の言語で言つと『始まりの世界』と言つところか。

そこはな、この世界で言う神話の世界なのだ。

いや、そもそもいくつかの神話はもともと、あちらの世界での実際の出来事だ。それが空間の歪みによってこの世界に投影され、伝わっていった。

そんな、お前達の世界ではありえない闘いの世界こそが『始まりの世界』というわけだ」

(……これはどう反応すればいいのだろうか?)

隼は黙っておくように言われたため、一人心中でそう思っていた。

「次にお前がそこに行かなければならない訳なのだが……

いや、その前にあちらの世界の現状を話そうか」

(何か深刻そうだな……)

テトラの声は最初に会話した時のものとは明らかに雰囲気は異なり、今は深刻そうに語っている。

「今、あちらの人間は神々と戦争をしている……いや、違うな……そう、神の干渉から逃れた、と言えば分かるか?」

(……分かりません……)

むしろ分かる人なんているのだろうか、とも思っていた。

「神はいる。その事を頭に入れて聞くがよい。

それで神って存在は世界の管理をしている。基本的に人間からの干渉は出来ないのだが、あちらの世界の人間は神を人間界に引きずりおろして……殺した」

(……それはどのくらい凄いことなんだ?)

「神はな、人間界だと本来の力の百分の一の力も出せない。人間も水中で走るとは難しいだろ？」

それと同じだ。神とて人間界では闘いにくい。おまけに人間は神を強制召喚させる際に、さらに百分の一の力しか出せなくする結果を張った。要は一万分の一の力も神は出せない。そして、殺された「テトラ自身も死「神」のはずなのだが、同じ「神」が死んだことを全く気にしていないかの様に話した。

(……人間もやるなあ……)

それに対して隼は感心していたのだった。

「下級神が殺されるところまでは別に上位の神々は気にしていなかったのだが、その後、人間はとうとう中級神まで殺してしまった。そして上位の神々……上級神以上が人間を危険視し始めた。

だがな、神が自ら人間界に降りることは神々のシステム上問題があった。だから神は『人間』を使うことにした」

テトラは大事なこともスラリと、会話の流れで言った。

「は？」

それはどういうことですか!？」

今まで我慢していたが、とうとう隼は声を出してしまった。

しかし、テトラも特に気にする様子もなく話を続けた。

「他の世界の人間をあちらの世界に潜り込ませ、滅ぼさせるために。ただ、リスクも大きかった。世界を渡ることの成功率は一パーセント未満。

そして失敗したら魂は……消える……」

テトラは重そうに語るものの、隼には魂という物がよく分からないため、テトラに尋ねた。

「魂が消えると、どうなるのですか？」

「…一つの魂が消えることで数万の人間が…消える…」

「??」

待つてください。どうして魂一つで数万人もの人間が消えるのですか!？」

「…世界つてもものはな、神ですら幾つあるのか分からないんだよ。

例えば神の上の神、その上の神、と可能性の話をしたらきりがないことがある。

同様にそれが積み重なり、私達ですら知らない世界がある可能性もある。そして魂は一人一つではない。世界を越えて繋がっている。だからなんだ…」

「なら、どうして死神が俺に接触してきたんですか？」

一度話したら止まらない。だが、テトラも怒ることはなかった。

黙っていた意味はあったのだろうか、とさえ思えた。

そして、今の隼の発言。気がつくとう隼は何気なくテトラのことを死神と言っていた。

隼はいつの間にか疑いが完全に消え、テトラを死神と認識したようだった。

「うむ。それでなその魂の消滅のせいで世界のシステムが壊れ、世界が滅んだ。それも既に数百は越えている」

「えっと、その神々のシステムとか世界のシステムって——」

——何なんですか？

そう聞こうとしたが、できなかった。

テトラの声が隼の声を遮る。

なぜなら、

「なっ——!!」

くそっ！もう時間が無い。今すぐあちらに送るぞ——！」

急にテトラが焦りはじめたからだ。

「え？ えっ！？ それって魂が消え——」

「大丈夫だ。そのための『才能』をお前に与えておる。あちらの言語も頭の中に突っ込んである。だから頼むぞ。

世界を救ってくれ」

「ちよつと待——」

そして隼は意識を失った。

…ただ、彼には意識を失う前に言いたいことが一つあった。

だから、結局何をすればいいのですかっ——!!？

そう…テトラは隼に「世界を救ってくれ」とは言ったものの、何をどうすればいいのか、という点については一切教えていなかったのだ。

01 異世界と新たな出会い（前書き）

第一章

異世界突入編

01 異世界と新たな出会い

「……んっ……ん」

荒神隼は何か生暖かい物にぺろり、と頬を舐められた様な感覚と共に目を覚ました。

「ここは……？」

まだ意識がはつきりとしていない中、隼は周りの状況を確認しようと辺りを見渡す。

そこは見渡す限り木しかない。密林地域とでも言うのだろうか。そんな場所だった。

そして隼の隣には彼が今まで見たこともない生物がいた。

(…コイツは犬か？ 犬なのか？

見たところ、ここは山か森の中なんだろうけど、この犬っぽいのは何だ？？)

そう考えていると、隼はようやく思い出した。

テトラに異世界に送られたことを。

「ここが異世界、か…」

隼は感慨に浸る、というわけではない。むしろ本当に異世界なのか、どうか疑っていたくらいである。

隣にいる生物の頭を撫でながら、隼は呟く。

「はぁ…結局俺は何をすればいいんだろ…そもそも何で俺なんだ？ 才能の光ってなんなんだよ？」

…いや、その前に必要なことは何も言われてないよな……」

そして、隼がぼんやりしていると、先程の生物が隼の足に頬をすりつけてくる。

その生物の身体の大きさはまるでチワワの様に小さく、隼は何も知らないが、たぶん何かの子供だろうなと思った。

この大きさと大人という可能性もあるのだが。

その全身の太さはチワワより断然太く、体毛は真つ白な毛できれいに整っていて、触り心地がたまらなく良かった。

だが、犬にしては顔つきが少しおかしい。

確かにかわいらしいのだが、犬とトカゲを合わせた様な顔つきをしている。

「きゅ〜？」

その生物は、まだ鳴きながら隼の足に頬をすりつけ続けている。

（俺の顔を舐めたのも、コイツだろうな）

隼はのんびりと考えているが、よくよくその生物を見ると驚くべきモノがあった。

「これは羽根だよなあ？」 この生物の背中にある鳥の羽根のような物を優しくつまんでみる。

その羽根の大きさだけを見るならばさほど大きくはないが、身体の大きさと比較して考えると中々のものである。

犬とトカゲを混ぜたような顔をし、四足歩行で白いふさふさの毛を持つている。そして大きな羽根が生えている生物。

まとめるところになる。

犬でないことは確定していた。

（……なんかドラゴンみたいだな……）

と、冗談半分で思ったが、テトラがこの世界は隼が元いた世界の神話ので出てくるような世界だと言っていたことを思い出した。

それなら、これもありえるのか、とそこで考えるのを止める。

「よいしょと」

隼はその生物のことを無視して立ち上がったものの、隼にはここがどんな所なのか検討もつかない。

「まあ、適当に動き回ってみるか…」

まずは人を探そうと隼は思っている。

そして街に行く。

情報が必要だと思つてなのだが、それ以上に野営などしたことない隼にとっては、山の中で夜に一人にいることが、とても怖く、怯える姿が隼自身でも目に浮かぶというのが大きな理由だ。

度胸がないな、と自虐すらしていた。

「ぴゃあー！」

そう考えながら歩き始めると、この生物も隼の横に並ぶようにしてついてくる。

「しっ、しっ。こつち来んな！」

隼は手で追い払うようなジェスチャーを見せながら言うが、

「ぴゅっ？」

「あー、絶対にわかってないな。…まあ、当たり前か。

……なら、まずはコイツを引き離しておくか」

こんな小さな生物でも、どんな習性のある生物か分からないのだから、いきなり襲い掛かってくる可能性もある。

だから、隼は早くこの生物を引き離したいと思っている。

そして、走って逃げようかと隼が思っていた時だった。

近くの草木が、ガサガサと音をたてた。

隼はその方向に素早く振り向いた。

「ぶごおおおお」

そしてそこからは奇妙な生物が出てきた。

一瞬、人間かと思っただがまったく違った。

その生物は二足歩行という点は人間と同じなのだが、他が大きく異なっており、皮膚は濃い緑色をし、瞳の中は全て真つ黒、黒目しかない様に見え、耳は人間のそれよりもはるかに尖っていた。

身長は一メートル程であろうが、筋肉の付き方が激しい。

相撲取りよりも太い体つきなのにも関わらず、それが全て筋肉でできているように思わせる程の締まり具合であった。

そして、その手の中には太い木でできた丸太の様なものが驚掴みにされていた。

「ぶごおおおお！」

そいつはそう叫びながら隼を再度睨み付け、襲い掛かってきた。

「クソッ！ 俺が何をしたんだよ！」

涙目になりながら全力疾走する男がそこにいた。

「はあ、はあ、はあ」

地面が柔らかく走りにくかったため、隼は十分以上走り続けて、ようやく先程の生物を撒けたようだった。

「ぴゃああー！」

「なっ！」

隼はあまりに本気で走っていたせいで気付かなかったのだが、その声の主である小さなドラゴンのような生物は隼の背中にくっついていた。

そしてようやく息が整ってきた頃、近くから音が聞こえてきた。その音はまるで滝が流れ落ちているような音であった。

「……水…水」

今しがたの逃走で、すでに隼の喉は渴ききつている。

水に飢えてた隼は一目散に音がどこから聞こえるのかを聞き分け、足を進め始めた。

小さな生物も付いてこようとするのだが、隼には振りほどく余力はどこにも存在しない。

予想通り、歩いてすぐのところまで滝を見つけた。

その滝の下にある湖らしき所には、底が透けて見えるほどの綺麗な水があった。

隼は早速、勢い良く、大量に水を飲む。

水を飲み終わると、なぜか隼の身体は火照ってたまらなくなった。それは走ったから暑い、というわけではない。その熱はすでに引いている。

しかし身体の内側からは止まることなく熱が生まれ続けているように感じさせる。

（まさか、この水、飲んだらやばいのか！？）
そう思っていると、とたんに身体の熱は消えた。

本当はこのことについてもっと考えるべきだったのかもしれないが、そんな考えは頭の中から飛んでいく。

顔を上げた隼にはそれ以上の驚きがあったからである。

目の前には水浴びをしている女性がいた。

無論、水浴びをしているのだから裸である。

その女性は隼に背を向けていたため、どのような顔をしているかは分からないのだが、肌の色はとても白く、髪は灰色のものを腰まで真っ直ぐに伸ばしていた。

身長は一六〇センチメートル程で、締まるべきところは締まっている風な女性である。

「……って何してんだ、俺…これ、覗きだろ…」
隼は一人そう呟いた。

しかし、思わぬ存在がその独り言に反応してくる。

「ぴゃああー!!」

もちろん、先程のドラゴンの様な生物の声である。

「えっ!!!!」

「あっ!!」

隼も水浴びをしている女性もその鳴き声に反応してその生物の方に振り返った。

だが、すぐに隼はもう一度その女性の方に振り返る。

その女性はとても美しかった。

おそらく、隼ととの年齢の差はあまりないだろう。

そのため、顔も少しあどけなさが残っている。だから、かわいいと言っ表現でも合っているような気はするが、やはり綺麗や美しいと言っ言葉が相応しく思えた。

大きな灰色の目。

そして先程言ったようにあどけなさが多少残っているが、顔立ち
は全体的に整っている。

隼は彼女に見惚れていた。

(……ヤバッ)

二人の目が合ったと同時に隼が我に帰った。

(どうする、どうするよ？)

いや、待て、落ち着け、俺。今この場面なら、逃げるべきか。いや、だめだ、だめだ。ここがどこかわからないんだぞ。それに、さっきの危なっかしい生物もいるんだぞ。

…謝るしかない！)

以上のことを隼はわずか数秒で考えた。

そして素早く、深く頭を下げて言った。

「す、すみません！！」

本当に覗こうなんて気はなくて——」

そのまま隼はチラリとその女性の方を見た。

勿論、下心などではなく、彼女がどんな反応をしているのか気になっただからだ。

もしも、隼が思っただ以上に彼女が怒っていたのならば、さらに誠意を見せなければならぬ。また、彼女が恥ずかしがっているような反応をしているのなら、断りを入れてから一旦この場から退いて、少し離れた所で落ち着くのを待った方が良くかもしれない、という考えがあっただからである。

「えっ……!?!? 白!?!?」 だが、彼女の反応は予想していないものだった。

彼女は何に対してなのかは分からないが、「白」と言って驚いていた様子でいる。

何が白なんだろう、と思うが、すぐに、この生物のことか、と納得した隼に彼女は話し掛けてきた。

「み、見た?？」

彼女は僅かに顔を赤らめて、可愛らしかったのだが、隼は何かその奥に別の感情を感じてたまらない。

(こ、これはどう答えるのが正解なんだ?)

見てない……とは言えないし、ほんの少しだけ、って言うべきか?)

しかし隼は返答の方に思考が働き、一人苦悶していた。そうしていると彼女はもう一度尋ねる。

「見たの、ですか……?」

それと同時に彼女は何とも言えない表情に変わっていった。

「そっか……見たんですね……」

暗い、暗い、悲しみの表情であり、諦めの……負の表情。

その表情を隼は、まるで見慣れたものに感じ取れていた。

直感なのだが、もしかしたら自分と同じように境遇の人なのかもしれない、と隼は思う。

そして、彼女はその表情のまま小さく呟いた。

「……………私の髪を……………」

「そっち!?!?」

隼は思わず頭を上げてしまった。

「あつ……」

「あつ……」

二人の視線が再びぶつかり、隼はなぜか、一度目に視線がぶつかった時は焦っただけだったのだが、二度目になると顔が赤くなってしまうていた。

それに対して、彼女は目が合った瞬間だけは驚いていたようだったが、その後すぐな負の感情しか見受けられない表情に戻っていた。

隼はもう一度素早く頭を下げ、

「ご、ごめん。あ、あの……えっと……」

気が動転して何を言っているのか分からない隼に彼女はもう一言、言葉を掛ける。

「いいから……気にしないでいいから早くどこかに行って」

その声はどこか、いや、一言一言、全てが寂しく感じられる声だった。

(…髪のことでは何かあったのだろうか……)

もしそうならば、ここは何も言わずに立ち去った方がよいのかもしれない。下手なことを言えば余計に相手を傷つけることになるからだ。

隼はそう思っている。

だけど――

隼は立ち去る前に口を開いた。

どうしても彼女の顔が、心の奥底に突き刺さるから。

できるだけ優しい声で、

「ごめんね。髪も見えたんだ」

声を張り上げて、

「だけど――」

そして再び優しい声で、

「綺麗な髪だったよ」

そして、後ろに振り向く。

本来なら隼はここまで頑張る必要がないのだが、彼女のあの悲しそうな顔がどうしても頭から離れなかった。

だから頑張った。

そう——頑張ったのだ。

隼は昔の出来事のせいで、人と会話をするときに砕けた話し方で話そうとすると異様に緊張してしまう。

対人恐怖症と言っわけではないが、緊張する。いや、そうでもない。緊張とも少し違う。堅い口調——敬語とはすこしちがう——なら緊張することなく会話ができる。

だが、砕けた口調では話せない。

だから、優しく話すことは隼にとってはとても大変で、苦しいことだった。

そして隼はそのまま去ろうとした。

だが、その時、

「待って!!」

後ろから隼を呼び止める声がした。

隼は耳を疑う。

なぜ、俺を引き止めるのだ、と。

彼女は続けてこう言った。

「もう一度……さっき言ったことをもう一度言って」

上手く聞き取れなかったのだろうか、ただそれだけか、と納得し、隼は深呼吸をしてからもう一度、優しく言う。

「ごめん。髪も見えたけど、綺麗な髪だったね」

「……本気で言ってる？」

「ん？ ああ、本気だよ。真っ直ぐなめらかに伸びていて、それに灰色の髪って見たことなかったけど、とても綺麗だと思うよ」

彼女は数秒隼を見つめて、そして、

「——っ！！」

なぜか顔を真っ赤にしていた。

「えっと、俺なんかおかしいこと言っただけかな？」

「……………少し」

「えっ？」

「少しそこで待ってて！」

彼女は隼の予想の右斜めはるか上空を通り抜ける言葉を言い残して、近くの岩場に向かった。

服を着るためであるが、その際に隼が見た彼女の目には涙が浮かんでいた気がしたのは、ただの気のせいだろう。

彼女が行ってしまった後、これは失敗したのかな、何も言わなかった方がよかったのか、と隼は不安になる。

「……………ふうー……………」

隼は一息つく。

不安だろうが、少し疲れた。

だが、その疲労感は少しであり、思っていた程は疲れていなかったことと自分でも思いの外、スラスラと言葉が出てきたことは意外だった。

（髪が綺麗だと思ったのは本心だったからかな）

そこで隼はふと、気付く。

（あれ？ あの生物どこ行った？

……………まあ、いっか。巣にでも帰ったんだろ）

そして、待つこと十分と少々。

「ごめんなさい。お待たせしました」

ようやく彼女が姿を現した。

彼女は黒を基調とした半袖のカッターシャツと、こちらも同様に黒を基調とした短めのスカート。さらに赤いネクタイを着けていた。そのデザインこそ、隼は珍しいと思ったものの、雰囲気は隼の世界の制服その物だった。

「えっと、そうですね。まずは自己紹介を。」

私のことはリリーって呼んでください」

俺がリリーのことを眺めていると、彼女は恥ずかしそうに話し出した。

「俺は荒神隼と言います。よろしくお願いします、リリーさん」

やはり隼の口調は堅いものとなっていた。

「リリーでいいですよ」

「いえ、ですが…」

「『さん』禁止!」

「わ、分かりました。リリー」

隼がリリーの勢いに押されたような形で「リリー」と呼ぶこととなった。

「ふふっ」

突然、リリーが笑いだす。

隼はまるで頭上にクエスチョンマークがあるかのように思える、

不思議そうな顔をしてリリーを見る。

「あつ！ ごめんなさいっ！！」

リリーは我に返ったように謝る。

「別にいいですけど、どうしました？」

「えっとね、堅っ苦しいのはなしで、もっと楽にしない？」

「……………リリーがそうする分はかまいませんが、俺は……………」

「だめ？」

リリーが計算したような角度での上目遣いを使いながらお願いする。

隼はその仕草に、ドキリとしてしまったが無理なことは無理であった。

「すみません。少し事情がありまして……………だけどいつか、そうなる様にしておきます」

「そつか。まあ、いいや」

そして、そのまま会話が続けるのだが、これからはリリーが一気に隼に質問を投げ掛けてくる。

「だけどさつきと話し方変わってるのはどうして？」

あと、アラガミハヤト？　なんて呼べばいい？」

「えっと、隼でいいです。それと先程の話し方は、その方がリリーも落ち着くかな、と思ひまして」

「ふうーん」

リリーは小悪魔的な笑みを浮かべて隼を見る。

「そうやって女の子を口説くんだ」

「ぶっ！！」

思いもよらないコメントに隼はおもわず唾を噴いてしまった。

「いや、いや、いや。そんなことはしませんよ」

「ま、そういうことにしといてあげる」

隼は、どうしたものか、と思ったが、すぐに頭を切り替えてリリーにお願いをする。

「リリー。出会ったばかりなのに申し訳ないんだけど、少しお願いがあります。いいでしょうか？」

「なに？」

「近くの街に連れて行ってほしいのです」

「……」

隼はこの世界の情報収集という意味で街に行きたかいと思っている。

だから頼んだのだが、なぜかリリーは一瞬顔を強張らせた様に見えた。

しかし、それは一瞬のことで、彼女の表情はすぐに元に戻る。

隼もそれが一瞬のことだったため、あまり気に留めず、見間違いだろつと自分の中で勝手に決め付けていた。

「……いいよ。」

……だけど、ハヤトはどうして自分で行けないの？」

リリーから、返答しづらい質問が隼に問い掛けられた。

「……俺さ、かなりの田舎に暮らしていたんですよ。それで訳あって街に行きたかいのですが、行き方が分からないくて……」

よくもまあ、こんなに言葉を並べたな、と隼は自身で呆れていた。

「……ふうん。まあ、いつか」

リリーは納得こそしていなかったが、ありがたいことにそれ以上追求してこなかった。

……そのはずなのだが、リリーは隼の顔を見続けている。

「えっと……なんですか？」「そのね、あった時から気になってただけだね……その白髪はくはつって地毛？」

「……白髪？」

…誰のことですか？」

「なに言ってるの？ 自分の髪でしょ？」

隼はその言葉の意味が分からなかった。

それは、隼の髪は黒色である……はずだから。

「リリー、鏡とありますか？」

「ん、あるよ。はい」

そう言ってリリーはポケットから小さな手鏡を取り出し、隼に渡す。

隼はそれを受け取って自らの髪を見る。

「——なっ!？」

そこにいたのは白髪の隼だった。

目や耳にかからないくらい長さや癖のない髪質は変わっていなかったが、色は変わっている。

しかし変わっていたのは、それだけではなかった。

瞳の色も変わっている。

——翡翠色に。

隼はそのまま他の身体の部位も見た。

しかし幸いと言うべきなのか、変わっていたのは髪と瞳だけだった。

一七。センチメートルを越えた程の身長に少し細めな体型、良くも悪くもない顔の作り、と他はいつもどおりの隼であった。

ただし顔は髪と瞳の色のせいで、今までとは異なった印象を受ける。

自分で思うのも如何なものかとおもуг、隼は黒髪と黒目の時よりほんの僅かだが、顔つきが良い様に思った。

リリーが隼と出会った直後に「白」がどうこうと言っていたのは、隼のことだったと言うわけだ。

（転移の影響か？）

隼は一つの可能性を考えたが、しかしそれは答えが分からない。とあるまぬけな神のせいだ。

だから隼は理由や原因を求めるのではなく、事実を、結果のみを受け入れることにしようと、たった今思った。

リリーに、また嘘をついてしまう。

「そうです。これは地毛です……」

「そつか。じゃあ、よっぽど良い暮らしができていたんだろうね」

リリーからはよく分からない返しがきた。

「??」

どうしてですか？」

「だって『白』髪だよ!？」

『白』なんだよ!？」

リリーが怒った様に声を張り上げた。

しかし隼には、リリーがどうしてこんなにも「白」を強調しているのが分からない。

そもそも本当は今日、白髪になったばかりなのだから分かるはずが無い。

「リリー。別に『白』だからって別段、変わることはないですよ」

また嘘……いや、今回は適当なことを言った。

「嘘っ!？」

どうせ私の髪も馬鹿にしてたんでしょ!?!？」

また髪だった。

リリーはなぜか髪に対して異常に反応する。

その時、彼女の目からは涙が流れていた。

理由は分からない。何を言ってあげればいいのかも分からない。ただ彼女の必死さは隼に伝わる。

「俺にはリリーが何にそんな必死なのか分かりません」

「……えっ!？」

「だから教えて下さい」

沈黙が流れる。

そして――

「じゃあさ、少し違うけどいい？」

何を、とは聞かない。

言ったのは一言。

いいですよ、と。

「わ、私の髪を触って、か、感想を言って」

リリーは今泣いているせいもあるのか、真っ赤な顔で、二度目の上目遣い――今回はやろうと思ってやったのではないだろうが――で言った。

隼はリリーの目の前に近寄り、正面から彼女の長い髪に手を通そうとする。

「――っ!」

リリーはその瞬間、ビクリとし、目を強く閉じた。

そして隼は無言で彼女の、リリーの髪に手を通す。

リリーの髪質は細くて柔らかく、スラリと手から流れた。

「綺麗」

隼は無駄な言葉の一切を省き、本当に伝えないことだけを言った。けれどリリーはその言葉を疑ってしまう。

「嘘っ!？」

「いいえ、綺麗です」

「灰色なんだよっ!?!？」

「綺麗な色です」

「……………」

「……………」

「……………認めてくれるの？」

「ええ、綺麗です」

「…本当に？」

「本当です」

「本当の本当に？」

「本当の本当です」

「……………」

「……………」

そして、リリーが急に岩場の方へ走りだす。

だが、隼は追わない。

なぜならリリーの顔には涙とともに笑顔があったから。

そして、さらに十分後。

リリーが戻ってきた。

彼女の目は少し赤くなっているようだが、隼はそのことについては何も言わない。

「ごめんね……」

「気にしないでいいですよ」

「ん、じゃあ早速街に送ってあげるよ」

戻ってきたリリーは元気になっており、見ていて清々しく思える。

「それはありがたいんですけど、どうやって？」

「そんなの決まっているでしょ」

魔具をつかうんだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7349z/>

神の選択と抗う絆

2011年12月28日01時48分発行